

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520387

研究課題名(和文) 太平洋諸島の比較文化的ポストコロニアル研究

研究課題名(英文) A Comparative Postcolonial Cultural Study of the Pacific Islands

研究代表者

須藤 直人 (Sudo, Naoto)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60411138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イギリス及びアメリカ、オーストラリア、インド等旧イギリス領植民地において発展してきたポストコロニアル文学・文化理論を応用し、日本語及び英語圏の文学・文化における太平洋・南洋の表象に焦点を当てた。そうした日本、太平洋諸島、欧米での文化表象を比較分析することにより、日本の植民地支配の歴史と現代日本文化を太平洋の島々の観点から再考して示し、太平洋諸島による日本への文化的影響について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Applying postcolonial literary and cultural theories, which have been developing in the UK and its ex-colonies such as the US, Australia, and India, this research focuses on representations of the Pacific or the South Seas in Japanese and English language literatures and cultures. Its comparative analyses of such cultural representations produced by Japanese, Pacific Island, and Western artists and writers reconsider and show Japanese colonial history and contemporary Japanese culture from the Pacific Islands' viewpoints, and articulate cultural influences by the islands over Japan.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：太平洋 南洋 ポストコロニアル

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「世界の中の日本」という旧来のテーマを多角的多元主義的に再考することが、各分野・方面で必要とされている。そうした再考を行ううえで、「大陸」や「西洋」との比較に専らよるのではなく、別の視角から日本を見る新たな視野を獲得することは重要である。したがって、太平洋の島々から日本・日本文化を眺め考察することには一定の意義がある。ミクロネシアは「日本の植民地主義と文化」という問題系の中で、大陸(中国・朝鮮)や国内(沖縄・北海道)と異なる側面を持つ重要な地域だが、これらの地域と比べ、比較文学・文化研究においてミクロネシアが扱われることは少ない。

(2) 国民国家の枠組みだけで文学・文化を区切ることや、国民国家単位のみで文学・文化を比較考察することは、最近の最先端の文学・文化研究において行われてきた、テキストを開くという作業の方向に沿っているとは言えない。多様な受容者の多様な見方へと文学・文化テキストの解釈可能性を開いていくことが、文化研究において求められていることであり、文化が生まれ、出会い、つながり、移動する場・ルートとして、島、海、航路に注目することは、従来とは異なる枠組みによる文学・文化研究を可能にすると考えられる。

(3) 太平洋諸島と関連する文学・文化研究としては、欧米でのポストコロニアル文学・文化研究(旧植民地や非ヨーロッパ世界とかかわるヨーロッパ語とりわけ英語による文学・文化の研究)及び日本の南洋文学・文化研究(太平洋諸島を訪れた作家・芸術家による作品の研究)といった形での、それぞれに数少ない先行研究があるのみで、未だ十分な研究が行われていない状況である。こうした状況下で、日本の植民地主義・戦争と文学・文化との関係の問題が、欧米及び太平洋諸島とのかかわりの中で十分に再検討されないままになっている。

## 2. 研究の目的

(1) 日本・日本人・日本文化を、「大陸」や「西洋」との比較に偏らずに、特に近隣の太平洋諸島との関係の中で捉え直すことを目的とする。太平洋諸島との関係の中から、どのような新しい日本・日本人・日本文化のイメージが作られるのかを明らかにする。太平洋諸島との関係に注目することによって、従来知られている日本の文化がどのように異なって見え、新たな意味を見出し得るのかを明らかにする。日本文化における太平洋諸島からの影響について明らかにする。

(2) 従来別々に行われることの多かった、ポストコロニアル文学・文化研究と日本の南洋文学・文化研究とを統合することを目的と

する。環太平洋地域と太平洋諸島とを包摂した太平洋世界における脱植民地化の問題について検討する。こうした問題系の中で、日本の植民地主義・戦争と文学・文化との関係の問題を、日本と欧米のみならず太平洋諸島とのかかわりにおいて再考する。

## 3. 研究の方法

(1) 日本・日本人・日本文化を太平洋世界の中に位置付けて捉え直し、太平洋諸島との関係に焦点を当てることによって新たな日本文化論を論じる。そのためには、文化テキストにおいて表象された日本と太平洋諸島との関係について分析することが有効である。太平洋世界とかかわる旅行記・小説・詩・戯曲・漫画・映画・アニメーション・彫像・絵画等の多様なジャンルの、日本、欧米、及び太平洋諸島側のテキストを比較分析する。

(2) 太平洋世界の、あるいは、太平洋世界にかかわる表象文化を分析するうえで、旧植民地世界の文化を扱うポストコロニアル文学・文化理論が有益である。ポストコロニアル文学・文化理論を日本及び太平洋諸島の文化テキストに応用することにより、太平洋の比較日本文化論を行う。

## 4. 研究成果

(1) 以下 3 点をまとめた単著(英語)を出版した。日本の南洋表象について英語で書かれた単著はこれまで存在しなかった。日本語による従来の研究においても、文学・文化を広範に扱い、欧米及び太平洋諸島との比較文学・文化研究を行った単著は例がない。日本の文学・文化を、「ポストコロニアル」という文脈において、「島々と海」の世界の中で捉え直すことにより、新たな視角を提示した。ミクロネシアが日本の統治下に置かれた時期から 20 世紀末にかけての、日本の文学や漫画・映画等の大衆文化の中で、ミクロネシアやその人々がどのように表象されてきたかを調べ、表象の系譜及び欧米における南洋表象との関係、さらにはミクロネシアの文化との関係を明らかにした。

南洋・南島を描いた日本の文学と、現代の太平洋諸島(サモア、ハワイ、グアム)の英語作家の文学とを、欧米の南洋表象とのかかわりを基軸として、比較分析した。両者は、既存の欧米や日本の南洋表象を下敷きとしながら、それらを「太平洋諸島民の視点」によって相対化しようと試みた点で類似していることを示した。他方、「太平洋諸島民の視点」の捉え方や描き方の違いについて、地域や時期による特質を明らかにすることができた。

20 世紀の太平洋世界において、植民地支配を契機とする人や文化の移動と混淆を基盤とした「ポストコロニアル」の歴史・思想の伝播と共有により、「島々と海」の表象ネットワークが形成され、それは日本を巻き込む

形で見出すことができることを明らかにした。

(2) 1920年代から1940年代半ばにかけて、当時日本の統治下に置かれていた南洋群島ミクロネシアを訪れた日本人作家達の旅行記や小説について、次の点を明らかにすることができた。航路の途上で見たものや船内で出会った人や光景など、航路が記述の順序や内容に決定的な影響を与えた。航路が整備されるにしたがって作家が着目する点が固定的になり、類似の記述内容や表現が繰り返されるようになる。南洋航路の船上から見える情景、港と宿泊地及びそれらを結ぶ経路において目にする景色や耳にする音声、欧米の旅行記・小説に記述された内容・表現の組み合わせによって、「南洋」「南島」のイメージが描き出された。作家達は、現地民の視点を考慮に入れたり、欧米文化や日本文化と現地の文化との混淆に着目したりする記述によって、既成の公式の「南洋」「南島」イメージに抵抗し、異なるイメージを作り出そうと試みる態度を表現した。だが、それが繰り返されることで、かえってステレオタイプを強調したり、新たなステレオタイプを形成したりすることにもなった。

(3) パラオの伝統文化・精神が、欧米や日本との接触の中で「伝統」として成立した過程と、それらが日本の表象文化に与えた影響、及びそれらがパラオの文化においてどのような形で表象され、変化してきたかについて、明らかにした。具体的には、日本統治の中心地であったパラオの伝統的建築物(パイ)、彫刻絵(イタポリ)、初めてヨーロッパを訪れたパラオ人リー・ブーに注目した。これらがイギリス等ヨーロッパとの接触、日本及び日本を引き継いだ米国によるパラオ統治、さらにパラオ独立を経て、文化的アイコン・観光のシンボルとして成立し、変容し、再発見され、応用されてきたプロセスを、「南島」「太平洋」を舞台・テーマとする日本の小説、音楽、漫画等と、ヨーロッパの文学、アメリカの大衆文化、太平洋諸島の伝説等を用いて、比較文学・文化的に考察した。

(4) 日本統治期の「南洋」と日本文化のかかわりについて、第一次世界大戦後から第二次世界大戦中までの時期において、南洋群島ミクロネシアの「同化政策」を背景に生まれた、「南島」を舞台とする著名作家達による小説「俊寛」や、当時の流行歌「酋長の娘」、人気を博した漫画物語「冒険ダン吉」は、いずれも、「異人種間恋愛譚」の物語構造とかわるボカホントス、ゴーギャン、ベティ・ブーブといった西洋世界の植民地表象を織り込んでいること、西洋・日本の植民地表象の影響下にありながら、それに抵抗する重要な要素を、パラオの伝統家屋パイに描かれている、結婚にかかわる物語(ストーリーボ

ード)を下敷きとした中島敦の小品に見出せることを明らかにした。

(5) 中島敦の南洋群島での体験・収集資料を素材とする文学テキスト(「南島譚」)は、パラオの伝統的集会所パイに描かれた絵物語から素材上の影響を受けているだけでなく、パラオの無文字文化のあり方と構造上の共通点が存在することを示した。また中島が小笠原諸島を訪れて記した詩は、小笠原旅行記としては異彩を放っていることを明らかにすることができた。

(6) 日本の大衆文化における「南洋」のイメージの問題を扱い、特に、第二次世界大戦時に制作され、国内及び南方の占領地において上映された日本のアニメーション映画『くもとちゅうりっぷ』を素材として、日本における南洋植民地の表象の問題について考察した。『くもとちゅうりっぷ』は、戦時色が薄い、戦争協力・戦意高揚を目的としない芸術漫画と見なされて、今日極めて評価が高い。この作品については先行研究が存在するものの、日本人の「南洋」イメージという観点からなされた研究は存在せず、日本の太平洋世界(特にオセアニア、アメリカ)との関わりという文脈の中に、日本のアニメーション映画を位置づけ、その表象について欧米文化や日本の伝統文化の影響を明らかにした。本作品の戦時色については先行研究においてすでに議論・指摘されているが、それに加え、本研究では当時の「漫画映画論」や「近代の超克」論をふまえ、そうした戦争協力・戦意高揚とかわる言説と本作品とが共有する部分から、本作品にみられる戦争や南洋植民地の支配の影響について考察・提示した。日本本土のみならず、南方の占領地でも上映されるということが、制作において南方の人々からの視線を意識することとなり、そうした意識が日本から南方に向けられた視線と関わりながら、どのような形で映画の表象に影響を与えたのかを示した。日本の伝統的な「異類婚」の物語構造がこの映画にどのように影響したか、そうした物語構造が太平洋を舞台とする戦争という時代背景の中でどのように要請され、機能したのかについても考察した。さらに、本作品では日本の神話や英米の大衆文化等を駆使して、現実には解決不可能な日本とアメリカ及び南洋植民地との関係にみられる矛盾や不安を、象徴的に解決する工夫が凝らされていることを明らかにした。そして、本作品がアメリカ(西洋)と南洋との間で揺らぐ日本が抱える自己・他者のイメージにかんする矛盾をも含んでいることを示した。作品のもつ今日的意義をポストコロニアル(植民地主義の影響下にあたり、その性質を帯びたりしつつも、抵抗の要素を含んでいる)という視点から提示することで、昨今の高評価の背景にある問題点を指摘し、当時から現在まで続く太平洋世界の文

化表象の問題について検討した。

(7) 現代のミクロネシアと日本文化のかかりについて、パラオのリー・ブーにかんする表象を、ポストコロニアル理論を用いて比較文化論的に考察することにより有効な視角が得られることを示した。18世紀後半イギリスで客死したパラオの「王子」リー・ブーは、当時ヨーロッパで「高貴な未開人」として広く知られた。20世紀末の同時期にパラオの女性運動家・詩人シタ・モレイと小説家・池澤夏樹が作品でリー・ブーを描いたが、両作品はポストコロニアルという思想的ネットワークを共有し、アメリカ・日本という大国に対する太平洋の小国による文化的抵抗を表しつつも、両作品が描くリー・ブーの性格はそれぞれのコンテクストに対応して全く異なっている。独立後のパラオにおいて、国民のアイデンティティ・シンボルとして扱われることとなった「高貴な未開人リー・ブー」のイメージは、現代のパラオ人及び外国人観光客にも強い影響を与えている。現代の太平洋世界におけるポストコロニアル的表象のあり方について、テキストにおける西洋流の伝統的表象への異なる対応を比較分析しながら、検討した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### [雑誌論文](計3件)

須藤直人、「外地」を描くことの政治的無意識：漫画映画『くもとちゅうりっぷ』とアメリカニズム・南洋植民地、比較文学研究、査読有、第99号、2014年、印刷中

須藤直人、「高貴な未開人」の比較文学：太平洋のポストコロニアル表象におけるパラオの王子リー・ブー、立命館文学、査読無、第635号、2014年、114-127頁

Naoto Sudo, Japanese Colonial Representations of the "South Island": Textual Hybridity, Transracial Love Plots, and Postcolonial Consciousness, New Literatures Review, refereed, No. 47-48, 2011, 129-147

#### [学会発表](計4件)

須藤直人、アニメーション『くもとちゅうりっぷ』の蜘蛛は「米国の黒人」か「南洋の土人」か、日本比較文学会・第48回関西大会、2012年11月17日、立命館大学

須藤直人、パラオの伝統創造と表象、近代エキゾティシズムの総合的研究、2010年7月4日、京都大学

須藤直人、椰子の木と章魚の木：南洋群島ミクロネシア往還の果て、日本比較文学会・第45回関西大会シンポジウム「戦間期における南方航路の比較文学：南洋、シンガポール、ペナン、インド」、2009年10月31日、立命館大学

須藤直人、パラオ観光文化と南洋航路 / ポストコロニアル表象、日本比較文学会・関西支部例会、2009年9月19日、大手前大学

#### [図書](計2件)

学術文献刊行会編、朋文出版、国文学年次別論文集 近代3(平成20年)、2011年、315-322頁

Naoto Sudo, Nanyo-Orientalism: Japanese Representations of the Pacific, Cambria Press, 2010, 232

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

須藤直人 (SUDO, Naoto)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：60411138